

卒業論文

建築にみるサライェヴォの歴史

～そのオスマン都市性～

南・西アジア課程 トルコ語専攻
8598037 深野 摩耶

目次

はじめに	1
第1章 オスマン朝の征服と都市建設	
第1節 サライェヴォのプロフィール	2
第2節 サライェヴォの起源 サライオワス：公邸のある平原	5
第3節 有力者たちによる都市建設	6
第2章 ガーズィー・ヒュスレヴ・ベイ施設群	
第1節 ワクフ制度とは	10
第2節 ガーズィー・ヒュスレヴ・ベイ施設群	
(1) ヒュスレヴ・ベイについて	11
(2) ワクフ文書の検証	12
(3) イスタンブル、ファーティフ施設群との比較	20
第3節 施設群内の建築物	
(1) 寄進時に建設された施設	23
(2) 後に管財人の手によって建設された賃貸不動産	29
おわりにかえて	31
地図	34
図版	36
参考文献	
図版出典	

はじめに

サラエヴォ　そこは 1995 年によく終結を見たユーゴスラビア内戦の惨禍の舞台であり、あるいは遡って 1914 年、オーストリア皇太子夫妻が暗殺されて第一次世界大戦へと発展していったあのサラエヴォ事件の地である。そもそも、これらの事件の発端となっているのはその複雑な民族構成であり宗教の違いであり、またこの地にイスラームをもたらし、多宗教、多民族を長い間共存させてきたのはオスマン朝の支配である。国民国家思想が支配的となった 19 世紀末から今日にかけて、これまでうまく共存してきた民族は互いに反目しあい、人類史上まれに見る惨劇を引き起こしてきた。しかしその淵源はオスマン朝の征服と支配そのものにあるのではなく、オーストリア＝ハンガリーをはじめとする西洋列強の干渉やオスマン朝による「改革」などを契機として近代になって発生したものである。このこと自体は、すでにさまざまな機会に指摘されてきたが、ともかくそのなかで、バルカン随一のイスラーム都市サラエヴォもすっかり荒廃してしまった。しかし、それ以前　もちろん一言でいってしまうと語弊があるかもしれないが、平和で、都市として繁栄を見せていたオスマン帝国時代　にはどのようなシステムで町が成り立っていたのだろうか。本稿ではその点を明らかにすべく、町の歴史を詳しく検証していきたい。サラエヴォがどのようにして建設され、どのような歴史をたどってきたのか、またそこにはどのような文化があるのか、といったことは一般には意外に知られていない。そういった意味も含めて本稿では、現在のトルコ共和国には属していないものの、重要なオスマン都市であったサラエヴォについて、そのごく一部ではあるが建築、町づくりを支えたワクフ（寄進）制度を検証しながら、イスラーム都市、オスマン都市としての性格を明らかにし、その魅力に迫ってみたい。

第 1 章では、オスマン朝の征服から初期サラエヴォ建設がどのように行われたのか、歴代の有力者たちが建設した宗教施設群のうち重要なものをいくつか紹介しながら歴史的に述べる。第 2 章ではサラエヴォ建設の要となったガーズィーヒュスレヴベイ施設群について、ワクフ文書の検証やイスタンブルのファーティフ施設群との比較、さらに施設群内の個々の建築体にも目を向け、イスラーム都市としての性格を明らかにしていく。

なお、サラエヴォのオスマン建築についての研究は Ayverdi の *Avrupa'da Osmanlı mimar eserleri: Yugoslavya* , cild3 kitab,pp.306-420 に手際よくまとめられている。本稿でも基本的にこれを参考にした。

第1章 オスマン朝の征服と都市建設

第1節 サライェヴォのプロフィール¹

サラエヴォはボスニア・ヘルツェゴビナ（旧ユーゴスラビア）の首都、海拔 537 メートルの高地に位置し、ミリャッカ（Miljacka）という小さな川（ボスナ川の西支流）に沿った町である。現在のサラエヴォは東西に約 10 キロ、南北に約 3 キロの山間の町で、現在の旧市街がオスマン朝時代の町の範囲に当たる。この街の位置する地点にはオスマン朝支配以前にはヴフルボスナ（Vrhbosna）と呼ばれる小さな要塞があるのみであったが、ヒュスレヴ・ベイ²が北方の戦略上の拠点として、数多くの宗教および公共施設を建設した結果、新都市サラエヴォは、イスラーム都市としての景観を備える「主都」となった。この町の中心である商業地区はバシュチャルシーヤ（Baščaršija：大市場）³と呼ばれ、現在でも伝統的な中世イスラーム都市の景観をよく残している。山間の盆地に位置するサラエヴォは近隣の豊かな鉱物資源を原料とした銅および鉄鋼業の他、織物、皮革などの産業が盛んであると同時に、バルカン内部とアドリア海とを結ぶ通商上にあたる中継貿易都市でもあった。したがって、この町はドブロヴニク（ラゲーザ）商人を通じてイタリアとの関係も深かった。



現在でも中世イスラーム都市の景観をよく残しているバシュチャルシーヤ

¹ この節は主に永田雄三、永田真知子「18、19世紀ボスニア地方の人びと」『アジア・アフリカ言語文化研究所』46、47合併号 1994、437 - 438頁と Popovic, "Sarajevo" in *Encyclopedia of Islam* vol.9, Leiden, 1993, p.29による。

² スレイマン大帝のベルグラード征服（1521年）に参加。1521-25年、1526-33年、1536-41年ボスナのサンジャクベイを務める。詳しくは第2章2節参照。

³ トルコ語のバシュチャルシユ（Baş Çarşı）がセルビア風になまったもの。

オスマン以前、バルカンの地には6世紀前半から7世紀前半にかけて定着したスラヴ人、セルビア人、クロアチア人、モンテネグロ人が住んでいた。彼らはカトリック教徒、セルビア正教徒、ボスニア教徒（ローマ・カトリックからの分派）などであったが、いずれも教会組織によるような強い結びつきを持っていなかった。15世紀、オスマン朝の征服によって大規模かつ多方向の改宗が見られたが、これはオスマン朝によるイスラームへの改宗の強制によるものではない。そのため、例えばボスニア教徒がセルビア正教、カトリックへ改宗した例も数多く見られる。（こうした改宗の結果としてボスニア教徒はいなくなる。）さらに大規模な人口移動も起こった。これは土着のキリスト教徒の流出入⁴やムスリムの入植などによるものであるが、これらの改宗、人口移動の結果としてサラエヴォはムスリムが大多数を占めるようになる。これはこの地がイスラーム支配下に入ったことを考えればその利便性からしても当然の出来事であろう。こうした改宗がすんなりといったのも、はじめに述べたようにこの地のキリスト教徒たちが信仰による強い結びつきを持たなかったためであると言われている⁵。

サラエヴォの建設当時の人口について、Hamdija Kreševljakovićによれば⁶1477年現在で103のキリスト教徒世帯、8のラゲーザ人世帯、そしてムスリム世帯はたった42世帯であったということである。しかし都市建設はあくまでムスリムであるオスマン人たちによって進められ、16世紀にはすでにムスリムが人口の大多数を占めるようになるのであるから、この頃から確実に、しかし長い時間をかけてムスリム、そして人口自体が増えていったと考えられる。キリスト教徒はセルビア正教徒と、その一部がラゲーザ出身であるカトリック教徒からなっている。1528年にはセルビア正教教会“Stara Crkva”が建設された。この教会は何度かの火事、特に1616年や1658年のものなどの際再建され、1730年には全面改築がなされ、さらに1793年にも修復がおこなわれた。一方カトリック教徒たちは16世紀後半を通して、町の中心部に位置するLatinlukと呼ばれる地区に住み着くようになる。そして忘れてはならないのが16世紀の半ば相当数住み着くようになったユダヤ教徒である。彼らは1492年にスペインを追われたセファルディーム系ユダヤ教徒⁷で、最初サロニカに移住し、やがて北上し

⁴ カトリック教徒の外部への移住、より条件のよい土地を求めてやってきたセルビア教徒の定着。オスマン朝下でセルビア教徒は比較的優遇されていたという事実がある。これはオスマン朝の宿敵ハプスブルク家がカトリックであり、当時の正教会がこれとほぼ断絶していたという事実のためか。

⁵ John V. A. Fine, “The Medieval and Ottoman Roots of Modern Bosnian Society”, Mark Pinson, *The Muslims of Bosnia-Herzegovina*, Massachusetts, 1996, pp.11-19

⁶ Nedim Filipovićの論文からの引用である *Esnafi*, 1958, 9より。

⁷ スペイン語の影響を受けたラディーノ語を共通語とする。イスラーム支配下で長年暮らした経験をもち、オスマン朝の体制にも短期間で順応した。

てスコピエをへてサライエヴォに入った。商業と金融に長けていた彼らは、ほどなくして市内のブルサ・ベデスタンを拠点として、金融と商業、それに各種の手工業に進出した。シナゴグ（ユダヤ教聖堂）は教会と同じく町の中心部に 1580 年ごろ建てられ、1697 年、1788 年の 2 回火事で被害をこうむり、1821 年には全面改築された。また、1813 年頃にはユダヤ教徒の人口は 2000 人に達していたという。史料には、町の中心に近く、シナゴグのある街区に 60 歳になるラビ（ユダヤ教会の長老）が住んでおり、その他に 3 人の両替業者（サラーフ）と一人の医者が記録されている⁸。

こうして町の人口は、1477 年には 153 世帯だったのが 1480 年には 181 世帯に、さらに 16 世紀前半には 1024 世帯に増え、16 世後半になると 4270 世帯にまで増加した⁹。そしてこの後も、地理的重要性と、度重なる征服戦争による産業の発展に支えられてサライエヴォは拡大していく。その間、人口の大多数を占めたのは常にムスリムであった。

さて、いよいよオスマン朝によるサライエヴォ建設へと筆を進めていきたいが、そもそもオスマン朝のサライエヴォ征服とはいつなのだろうか。いくつかの史料を見たが、これについて明確な日付を与えることはできない。例えば 15 世紀末の年代記作者アシュック・パシャ・ザーデは、*Bosna Krallığı ve Yayçe* の章のなかで「この征服はヒジュラから 607 年過ぎた時に起こった。」¹⁰ と言っているが、別の年代記 *Tacüt-Tevarih*¹¹ では 867 年春とされており、イスマーイール・ハック・ウズンチャルシユル¹² はというと 867-868 年の日付を与えている。しかし、コソヴォの戦い以降ボスナ王からジズヤを得ていたムラド 2 世の治世、821 年（西暦 1418 年）に、ボスナが占領されたとも言われている。さらに県知事（サンジャクベイ）についても、トブカブ宮殿の公式文書ははじめのサンジャクベイをイスハク・ベイ（İshak Bey）としているものの、他の史料ではミネトオウル・メフメトベイ（Minnetoğlu Mehmed Bey）であるとしており、またその日付も明らかにはされていないという¹³。このように、ボスナ征服の年月日やはじめのサンジャクベイに関する記述は各史料で必ずしも一致しておらず、明確にいつが征服の日付なのか結論付けることは難しい。しかしオスマン朝の支配がある一時点を境に起こったのではなく、この地方の改宗、人口移動にともなっ

⁸ 永田雄三「18,19 世紀サライエヴォのムスリム名士と農民」、歴史学研究会編『地中海世界史 3 ネットワークの中の地中海』青木書店 1999 年、180 頁。

⁹ Popvic, *op.cit.*, p.30

¹⁰ Derviş Ahmet Aşıkı, *Aşık Paşa-zade tarihi*, İstanbul,1913 ,p.166 (Ayverdi より)

¹¹ Sadüddin Efendi, *Tacüt-Tevarih*, 1.C., İstanbul,1862, p.493 (")

¹² İsmail Hakkı Uzunçarşılı, *Osmanlı Tarihi* 2.C., Ankara,p.82 (")

¹³ Dr.Ekrem Hakkı Ayverdi, *Avrupa'da Osmanlı mimar eserleri:Yugoslavya* ,cild3 kitab. İstanbul: İstanbul Fetih Cemiyeti,1981,p.308

て徐々に及んでいったと考えるのが妥当であるので、その事実を考慮すると、征服の日付をこれ以上はっきりとさせる必要はないだろう。

第2節 サライェヴォの起源 サライオワス：公邸のある平原

西暦 1552 - 4 年頃ボスナ州は州に昇格したが、その州都は北方のパニャルカに移った。サライェヴォがボスナ州の州都となったのは 1639 年のことであるが、これ以後 1850 年までボスナ州の長官はトラヴニクに駐屯していた¹⁴。しかしこのあいだにサライェヴォは、先にも述べたように皮革・銅および手工業の町として、またアドリア海とバルカン各地とを結ぶ商業都市として発展した。サライェヴォという名は、町の中心を通るミリャッカ川の左岸に今日のヒュンキヤル・モスク（統治者スルタンのモスク）¹⁵が作られる以前に、最初のサンジャクベイが公邸を建てたことによってサライ (saray: 公邸) の言葉が言われるようになり、町に対してもサライオワス (saray ovası: 公邸のある平原) と言われるようになったことに由来している。今日のボスニア語の発音であるサライェヴォも、サライオワスの発音から来ている。その後ヒュンキヤル・モスクの裏にはサンジャクベイ達が住んだいくつかの館が建てられたが、現在はひとつも残っていない。ただ周辺の地名に Konak Altı (館の下) の名が残っているだけである。これらの館のうちひとつについて Hamdi Kreševljaković の論文に記述がある。これによれば「館はハーレム (婦人達の間) とセラームリッキ (男達の間)¹⁶の 2 つの部分からなり、間は廊下¹⁷でつながれている。また建物内部は 1207 の金が費やされ、絨毯や鏡、セディル¹⁸も完璧な質である」としている。プランを見ると、これは典型的

¹⁴ Ayverdi, *op. cit.*, pp.308-309.

¹⁵ ボスナサンジャク・ベイ、ガーズィー・イスハック・ベイの息子ガーズィー・イサ・ベイがイスラーム暦 862 年 (1457 年) に建てた木造のモスク。866 年メフメト 2 世がボスナを訪れた際このモスクをすっかり気に入ったため、イサベイが自ら願い出て Cami-Atık, Ehülfethül-Megazı Sultan Mehmet Han の名でカーディー台帳には登録されている。(出典: Ayverdi, *op. cit.*, p361)

¹⁶ イスラームの教えで、婦人達は家族以外の男性との接触 (外来者とも) が禁止されていたためこのような区画分けがなされた。外来者があった場合、婦人達はそれぞれの部屋に引きこもる。

¹⁷ 個々に独立する部屋を継ぎ合わせることによってトルコ民家は現出する。この連結の空間をソファと呼ぶ。他国、特にヨーロッパの民家とトルコ民家を大きく分けているのもこのソファの存在であり、ここでは日常のほとんどの生活がおこなわれる。食事、接客、団欒、農耕器具の手入れ、時には結婚式のような非日常の祭りごとに行われるまでここでおこなわれた。図 1 を見てもわかるが、ソファにはすべての部屋の入り口があり、廊下というよりむしろホールと呼べる。

¹⁸ 窓際などに部屋を一周するように設置された長いす。低いソファのようなもの。

なトルコ民家の様式に一致している（図 1）。地上階には二列の柱のある、石造りの 9 つの部屋があり、2 階には 12×12m の大広間と 20×8m の集会室と、たくさんの部屋があった。

しかし、ルメリ州の他の都市にはこうした地方統治者たちの公邸が現存している例は少なくない。例えば、ドゥブロヴニクの東に 20km の川沿いの小さな町トレビニエ（Trebinye）には、Resul Bey の館が残っている。内部の写真を見ると、天井中央のギョベッキ¹⁹や部屋を一周するセディルなどが見られ、伝統的なオスマン民家の様式であることがわかる（図 2、3）。ちなみに現在この館はコーヒーハウスとして使われている。また、モスタルの南に 25km のウストウルチェ（Ustulçe）という城砦都市には、ここが自治都市であったため Malikhane（王の館）などと呼ばれているものの、伝統的オスマン民家の姿を今に伝える公邸がいくつも残されている。こちらは外観の写真があるが、これもサフランボルなどに見られる民家とよく似ている（図 4、5）。

サラエヴォにおいてこうした公邸は現存しないが、ほぼ似た外観であったと推察できる。これらの写真は参考になるだろう。このように、アナトリアからバルカンまで、民家を例にとっても 1 つの文化圏の中に組み込まれていたことがよくわかる。

第 3 節 有力者たちによる都市建設

このような公邸のほかに歴代のサンジャクベイらによってミリャッカ川の土手がモスクをはじめとした様々な施設で飾られてゆき、サラエヴォは次第に都市としての景観、質を備えていった。そのさきがけは、この章のはじめにも述べた、イスラーム歴 862 年にガーズィー・イサ・ベイが建設したヒュンキヤル・モスクである。モスクの後、メドレセ²⁰、メクテップ（コーラン暗誦を中心とする初等教育施設）、図書館、ハマームがつくられ、この他ザーヴィエとメヴレヴィー教団のハーンカー、イマーレットを含めて 866 年 Cemaziyülulası 月（1462 年 2 月）ワクフ文書が整えられた。

つぎに建設事業をおこなったのはアヤス・ベイである。彼の身分やオスマン朝における地位についてはさまざまな説があるが、Muježinović はイサ・ベイの後継者であるといっている²¹。ワクフ文書でアヤス・ベイは慈善行為によってメスジド（街区ごとの小モスク）、メクテップを建て、ボスナ川の上に橋をつくり、これらにサライボスナのハマーム（公衆浴場）と 1 階建ての住宅と、賃貸店舗（数は不明）Visoka あるいは Visoko

¹⁹ ヘソを意味するトルコ語で、天井中央の飾り。

²⁰ ウラマーを養成するための高等教育施設。大きなモスクそのもの場合もあり、モスクの付属施設の場合もあった。

²¹ Ayverdi, *op.cit.*p.316

村のハマームと農場を財源として寄進している。ワクフ文書の日付は 882 年 (1477 年) となっている。ワクフの承認をしたのは、ボスナ県のカーディー・メフメトと、軍隊の遺産担当財務官 イブラーヒムである。

さらにこの後、イスケンデル・パシャが町の西端、川の左に今日のスケンデリア (Skenderija) に隣接した、大きなナクシベンディー教団修道場、イマーレットを建設した。向かいには大きな館、その隣にはキャラバンサライ、11 の店舗、そして橋が建設された。これらのイマーレットはバシュチャルシュの西側、古ヒセティマチャルシュの核を形成した。イスケンデル・パシャの息子ムスタイ・ベイはナクシベンディー教団施設の横に 924 年 (1518 年) にドーム付きのモスクとメクテップを建設した。モスクの建設によって周辺がイスケンデルパシャザーデ・ムスタイベイの名をとるようになった。モスクは 1935 年、ミナレットは 1960 年に焼失した。

さらに 968 年 (1560 年) には、1551 年から 1553 年までの 2 年間と、1556 年から 1557 年の 1 年間の 2 回にわたってベイレルベイ位についたアリ・パシャによってモスクが建設され、それによって周辺はアリ・パシャ・マハッレの名がとられるようになった。

このほか、フェルハド・ベイのモスクが建設された。これは、現在の Evropa Oteli と隣接し、ほとんどひとかたまりになって調和を保っている。ヒュスレヴ・ベイが建設した施設群にほど近く、今日においてもにぎやかな地区を形成している。同時にメクテップ、イマーレット、泉がつくられ、969 年 (1561 - 2)、ワクフ文書が整えられた。

そしてここで出てきたヒュスレヴ・ベイ施設群こそがサライエヴォの都市建設においてその中核をになった、大規模で重要な施設群なのである。長年にわたってボスニアのサンジャクベイを務めたガーズィー・ヒュスレヴ・ベイが 938 年 (1531 年) に建設した施設群である。この施設群は現在においても町の中心地を構成する要素となっており、周辺にはブルサベデスタン(中央市場)を核としたバシュチャルシーヤなど、大規模な市場も相変わらず繁盛している。さらにこれらと肩を並べるようにキリスト教会とユダヤ教聖堂(シナゴーク)も建っており、町の最もにぎやかな地域となっている。

トルコの都市の商業空間は、石造りドーム建築のベデスタン(中央市場)、キャラバンサライ(ハーンとほぼ同格、在地の商人ではなく旅商人が部屋ごとに賃借りする)、同業者が向かい合って並ぶ市場の店舗の 3 つの構成要素から成るが、このうちベデスタンは、高級織物商人や金融商人、政府の財務局が店や金庫を持つ堅固な施設で、特にオスマン朝の都市に発達し、イマーレットとともにオスマン朝都市の計画的な建設の核となった²²。サライエヴォにおいてはブルサ・ベデスタン(図 6、7)が唯一のベデ

²² 林佳世子「トルコ」、羽田正・三浦徹編『イスラム都市研究[歴史と展望]』 東京大学

スタンである。ベデスタンはルメリ州においては他にウスキュップ、ソフィア、フェリベにひとつずつ、エディルネに2つ存在する。このブルサ・ベデスタンは、サライボスナ、あるいは周辺の出身であった16世紀の大宰相リュステム・パシャが建造したものとされる。交易によっても繁栄するようになったブルサで作ったシルクを売るためにベデスタンをつくらせたそうだとされる。ブルサ・ベデスタンの名もここから来ていると言われている。この点について、永田雄三氏の前掲論文、同じく180頁において、「フスレヴ・ベグの建てたブルサ・ベデスタン……」という記述があるが、上述のようなベデスタンの性格や、本稿第2章2節で紹介するヒュスレヴ・ベイのワクフ文書にもベデスタンの記述はないことなどから、ワクフとは金庫・管理は別であったはずであり、少なくともヒュスレヴ・ベイの寄進行為によるものではないと考えられるだろう。

オスマン朝時代のバルカンの主要な幹線路はイスタンブルからソフィア、ベオグラードを経てヨーロッパにいたる南北道であったが、ドゥブロヴニクからノヴィ・パザールへいたる東西道とそこからスコピエへと下る道があった。サライエヴォはその中継地としての役割を果たすと同時に、ボスニア山中で産出する鉱物資源と畜産品およびそれらを原材料とした手工芸品を輸出した。

オスマン朝時代、サライエヴォのほかに北方のパニャルカと、トラヴニクとに州都が置かれた時代があったが、こちらは商業地理的には重要な地位を占めることなく、単に行政上の地にとどまった。パニャルカ、トラヴニクにも市場はあるが、ベデスタンはなく、サラシュ(saraş)という木造の市場である。

こうして初期オスマン支配時にさかんな都市建設がおこなわれ、16,17世紀オスマン帝国最盛期にはサライエヴォも最も輝かしい時代を迎える。この頃の様子について17世紀のイスタンブル出身の歴史家エヴリヤ・チェレビーはその旅行記のなかで、町には

- ・400の街区(10のキリスト教徒、2のユダヤ教徒のものを含む)
- ・17,000の世帯
- ・77のモスク(金曜礼拝の行われる大モスク)
- ・100のメスジド
- ・1つの時計塔
- ・たくさんのメドレセや他の宗教学校
- ・180のメクテップ
- ・47のテッケ²³

出版会 1991、202頁。

²³ スーフィー(イスラーム神秘主義)教団の修道場。

- ・110 の水場
- ・700 の井戸
- ・76 の製粉所
- ・300 のキオスク
- ・5 つのハマーム
- ・670 の私的なハマーム
- ・3 つのキャラバンサライ²⁴
- ・23 のハーン
- ・1080 の商店
- ・1 つのベDESTAN²⁵
- ・ミリヤッカに架かる 7 つの橋
- ・1 つの東方正教の教会
- ・1 つのカトリックの教会
- ・1 つのシナゴーク
- ・7 つのイマーレット²⁶

があったと述べている²⁷。

この記述について、特に街区数や世帯数に関しては異論もあるが、ここからは、サライエヴォがいかにもイスラーム都市としての性格を持ち、宗教、商業活動も盛んに行われていたかがうかがえる。また、そのなかにはキリスト教徒、ユダヤ教徒の街区や宗教施設も存在し、オスマン朝の統治が決してイスラームによる専制的、一元的なものではなく、多様性を許容するものであったことが読み取れる。

²⁴ 隊商宿。商人、巡礼者、旅人を宿泊させる。あるいは卸売商人の事務所として使われた。都市のバザールに隣接して建てられ、建築構造は一般に中庭があり、そのまわりを 2 階建ての小部屋に区分された建物が取り囲んでいた。1 階部分は商品を保管する倉庫、事務所として使われ、2 階部分は宿泊施設にあてられた。ハーンもほぼ同じ。

²⁵ 石造りの堅固な市場。貴金属などの高級商品を扱う。

²⁶ 給食所。

²⁷ Evliya Çelebi, Seyahatnamesi vol.5, Cop. Üçdar Neşriyet, İstanbul, 1984, pp.295-301



バシュチャルシーヤ付近で肩を並べるキリスト教会とシナゴーク

さらに次の章では質・規模ともにこの町の最も重要な施設群といえるガーズィー・ヒュスレヴ・ベイ施設群について、ワクフ文書の検証や個々の建築体の紹介を通して具体的に都市の性格を明らかにしていきたい。

第2章 ガーズィー・ヒュスレヴ・ベイ施設群

第1節 ワクフ制度とは

第1章のエヴリヤ・チェレビーの記述にあるような宗教施設は、イスラーム世界においてはすべてワクフと呼ばれるイスラーム法（シャリーア）独特の寄進制度によって建設された²⁸。ちなみにキリスト教教会やシナゴークはオスマン帝国下においてはトルコ法官（カーディー）に申し立てを行い、許可を与えられて建設や修復を行っていたようだ。ワクフの特徴は、宗教施設を建設するとともに、その施設の維持・運営費用の財源となる経済施設を同時に寄進する点である。財源としては、農地や果樹園などの土地のほか、市場の商店、隊商宿、公衆浴場などがあてられ、これらの賃貸料によって、モスクやマドラサなどの光熱費、修繕費、あるいはそこに勤める吏員の給与や学生の費用などが賄われた。

²⁸ 以下ワクフ制度については、三浦徹『世界史リブレット16 イスラームの都市世界』山川出版社 1997年、31 - 32頁と、林佳世子「都市を支えたワクフ制度」、歴史学研究会編『地中海世界史3 ネットワークの中の地中海』青木書店 1999年による。

寄進のさいには、文章を起草し、これに基づいてナーズィル（管財人）がワクフ財源と宗教施設の収支を監督した。宗教施設の建設にともなって、その運営費用を捻出するための市場や隊商宿などが新設される場合もあり、この意味でワクフは、都市の宗教施設と経済基盤をともに整備する役割を果たしていた。

そしてイスラーム世界の都市に生きる庶民にとって、ワクフ組織は何よりも、商業不動産の貸し手・借手との関係のなかで身近な存在であった。なぜならば、イスラーム世界の多くの都市で、都市の商業目的の不動産（市場の店舗、工房、倉庫、キャラバンサライ、粉ひき場、公衆浴場、コーヒーハウス、搾油所、屠殺場、皮なめし場など）が、実際そこで商売を営むものによって建設される例は少なく、まずワクフ財として建設された店舗や工房を商人や職人が賃貸する、というのが一般的な慣習であったからである。林佳世子氏の研究によると、ワクフ財でない（すなわち私財の）商業不動産の件数を知る手がかりが少ないため、商業不動産のワクフ指定率を正確に知ることはできないが、少なくとも、町の中心部に位置するまとまった市場の店舗の大半と、キャラバンサライ、公衆浴場などの大規模な施設のすべてがワクフ財であったことは間違いない、ということである。

これは、中東・地中海世界の都市の商業地区の空間的特徴にもよっているといわれる。この地域では都市の商業地区の密集度が高く、その中心部は非常に集約的に構成されていた。一本の通りを挟んで業種ごとに市場がつくられ、それが連なったり碁盤目状に広がって大市場を形成した。核となるベデスタンやキャラバンサライが適所に配置され、それらの建設には、一定の計画性と大きな資金が必要だった。このため、商売を営む個々の商人、職人が自分たちで建設することはなく、富裕な支配層の人々によって建設された商業不動産が賃貸物件として提供される傾向が強かった。」

第2節 ガーズィー・ヒュスレヴ・ベイ施設群

（1）ヒュスレヴ・ベイについて

それではガーズィー・ヒュスレヴ・ベイ施設群についてみていこう。その前に、建設者であるヒュスレヴ・ベイについて少し詳しく述べておく²⁹。彼は今のマケドニア、セレスという町でイスラーム暦 885 年（1480 年）、旧ボスニアの封建領主 Radivoje の弟フェルハド・ベイとオスマン帝国のスルタン、バヤズィド 2 世の娘セルチュカとの間に生まれた。彼はまず、スルタン・スレイマンのベルグラード征服（927 / 1521 年）に参

²⁹ 以下は B.Djuredjev and J.-L. Bacque-Grammont, “Khosrew Beg“ in *Encyclopedia of Islam* vol.,pp31-32 による。

加したのち、Shawwal 月 13 日（1521 年 9 月 15 日）にボスニアのサンジャク・ベイに任命される。町の征服の 2 週間後のことであった。サライエヴォに 4 年間とどまった後、ヤイツェの包囲攻撃に失敗し官職から追われた。しかしその 6 ヶ月ほど後彼はもとの地位に復帰し、それから 948 年（1541 年）に 60 歳をこえて死ぬまで、途中セメンドリアのサンジャク・ベイとしてベルグラードに駐屯した時期（1533 - 6）を除いてずっとサライエヴォにとどまった。

成功を収めた征服事業によって、彼はガーズィーと呼ばれるようになり、今日でもボスニアのムスリム達の間ではガーズィー・ヒュスレヴ・ベイの名でよく知られている。そして彼の軍事活動によってオスマン朝の勢力は広くボスニア、ダルマチア、スラヴォニアにまで拡大することになる。

また彼の征服事業は、彼にサライエヴォの拡大に費やすための莫大な富をもたらし、その統治期間に、サライエヴォはバルカンの重要な中心地に発展した。彼のワクフは、サライエヴォとボスニア - ヘルツェゴビナのムスリム達の文化的生活にとって非常に重要だった。20 世紀まで多くの公共施設がその収益から建てられていた。ワクフは今でも存在するが、17 世紀、とくにサヴォア公オイゲンの侵攻でサライエヴォが被害を受けた際の大火事で多くの財産が失われた。また、ユーゴスラビア政府の 1918 年以降の土地改革をはじめとする時代の変化とともに、ワクフに属した多くの不動産が失われた。さらに、先のボスニア紛争の際にも大きな被害をこうむったものと思われる。

（2）ワクフ文書の検証

それでは施設群に話を戻していこう。

この施設群は、モスク、メドレセ、メクテップ、市場、商品取引宿、ハーンカー³⁰、イマーレット、墓、ハマーム、そして最初の建設の時代より後にナズィルの努力によって付け足された時計塔、新たな 4 つのハーンから成り立っている。

これらの施設がどのように機能し、運営されていたかは、ワクフ文書を検証することで明らかになる。次に紹介するのはヒュスレヴ・ベイが寄進のはじめに整えさせた寄進状である。以下は、Ayverdi が現代トルコ語で紹介したものの翻訳である³¹。出典は Husrev Bey Vakıfı'nın 400. senesi hatıra kitabı, Spomenica Gazi Husrev Begove Cetriso Godisnjice, Sarajevo, 1932 である。

日付はイスラーム暦 938 年 5 月（1531 年 12 月中旬から 1532 年 1 月中旬まで）で

³⁰ テツケに同じ。

³¹ Ayverdi, *op.cit.* pp343-346

あり、文書の最後には 32 人の証人の名がある。カーヌーニー・スルタン・スレイマンは 940 年 1 月はじめ（1533 年 9 月中旬）に、ある譲渡書で多くの国有地をヒュスレヴ・ベイに譲渡し、この証明書はスルタン・ムラド 3 世、アフメト 1 世、オスマン 2 世、ムスタファ 1 世、ムラド 4 世、イブラーヒム、メフメト 4 世らの決定書とともに承認されている。

ヒュスレヴ・ベイはこの他に 943 年（1536 年）にメドレセ建設と義務について別の寄進状を整えさせ、1 年半後には 5 証人のサインとともに、短い寄進状でモスクに 2 回目の寄進増額をした。さらに、同日付で 3 番目の寄進状も整えさせている。この 3 番目の寄進状は、はじめの寄進状で決定された任務への追加と、新しいワクフ物件の追加がなされている。

収入面

ワクフ財源となる土地の指定。

-
- 1 - 3. ルメリ州ズィフネ郡の Kuru Meşe, Boytaçeşte(?), Kosor(?) の名の 3 村
 - 4 - 6. ヒュスレヴベイの父フェルハドベイからの分と、フェルハドベイからヒュスレヴベイの母親へ移しかえられた 1/8 分も加わった、Drama 郡の Nesi, zigosti という名の 3 村
 7. スイロズ郡の Nasuh Cündi 遺産相続人から買った Mansur Bey チフトリキ
 8. スイロズ郡の Musa Çelebi bin Mahmud Bey から買った組織不動産と土地と内部の奴隷達
 9. スイロズ郡の、İbrahim の娘 Hnım Hatın から買った不動産
 - 10 - 11. スイロズ郡のそれぞれ別の場所、Çeltikci と 村にある耕地
 - 12 - 14. スイロズ近郊の Yunus Paşa Çayır, Modine, Balgonluk 地区の牧場とそこで育てられている 100 頭以上の乗用馬、さらに 100 頭以上の雄牛と乳牛
 15. サライ郡の Lokviçe(Lokva?)地区の Yablanovia(Jablanica)村とそこに住む奴隷と家族、チフトリキと呼ばれた賃貸不動産、木々、まき小屋、そして山を含むチフトリキ。これは Jablanica Prozor の 10km 南にある。
 16. サライ郡の Ali Kazganı から買った不動産と土地
 17. サライ郡の Tur Paşa から購入した耕地
 18. サライ郡の 牧草地
 19. この牧草地とつながった (Doboj) という畑
 - 20-21. サライ郡の Dubrovnik?(Dobro Polje-Dobro Selo?)地区の Çernerika 村の近くの Redvine と Radvan のチフトリキ
 - 22 - 24. 再び前述の村付近の畑と、から購入された畑

- 25 - 26. Dubrovnik 地区の Yahşi bin İsa Bey から買った耕地（常に同じ牧草地の一部となる）
- 27 - 28. 再び Dubrovnik 地区の Drabnik 村の Şeyh Ferruh（サライボスナでモスクを寄進した人物かもしれない）の Virbil チフトリキ
29. 同地区の Bebekler Konağı と呼ばれる牧草地
- 30 - 32. ブロド郡の Teşne(Teşanji)kalesi 地区の Mehmed Çelebi bin Ahmed Bey チフトリキ Badmanska 耕地 Ahmet Voyvoda から買われた Teşne Kalesi 近くの Blana,Kozmadine,Gorne(Gornji),Dolne(Donji)耕地
- 33 - 37. Yayçe Kalesi 近くの Aydınluka 地区の Poçati, Yukarı , Aşağı Körne そして Aşağı Şebniçe, Çançe Tukidvik, Kavik の耕地と土地
- 38-43. Hüluç(Kljuc) と Ostroyçe(Ostrovac)Kalesi 周辺 の Malnevaş,Mahvik,Breci,Veļşani,Podgradye,Vokşik 耕地と全ての奴隷と子供達
44. Zırmana(Zrmanja)湖上の全建物、その粉引き用の石と水権利とともに Karluoğlu と呼ばれる粉引き水車小屋
44. サライボスナのガーズィー・イサ・ベイ施設群近くの、隣接したりあるいは分離したりした店舗
45. 広くて、内部には織物屋、刺繍屋の働いている terziler karhanesi と呼ばれる不動産

現金や宝石類といった類の動産ワクフは次のとおりである。

何ディルヘム分のアクチェか

-
- | | | |
|-----|---------|--|
| 47. | 825,000 | 15,000 のオスマン帝国の金貨と、外国の金貨。これらのそれぞれ全てが 55 ディルヘムに相当。このうち半分がフローリ(イタリア金貨)であることが説明されている。 |
| 48. | 132,000 | 合計 132,000 の、スルタン・スレイマン・ディルヘムとそれぞれ 60 ディルヘムに相当するといわれている重さの容器、すなわちボールや皿のような、純金のもの。 |
| 49. | 120,000 | アクチェにして 30,000 ディルヘムの純銀に相当する皿、容器。それぞれディルヘム銀の 4 ディルヘムと刻印された硬貨の価値で明らかにされた。 |
| 50. | 80,000 | 80,000 ディルヘム硬貨に相当の、13 個のルビーと豊かな球形をした |

		62 個のパールからなる宝石類。
51.	50,000	50,000 デイルヘム硬貨に相当の、合計 70 個の大きなパールから作られた宝石。各パールは 714 デイルヘム硬貨という計算で。(多少の違いはあるけれども)
52.	20,000	球形の、純粋な 100 個のパールからなる数珠球。各パール 200 の硬貨の計算で。
53.	198,000	ダイヤモンド、ルビー、トルコ石そしてエメラルドで飾られた剣、短剣、そしてナイフとリングの 198,000 デイルヘム硬貨の価値のもの。
54.	1,575,000	1,575,000 硬貨にして市場価格アクチュ
		<hr/>
		3,000,000 (合計)

ヒュスレヴ・ベイは以上の私有地 (mülk) と不動産、その他の財宝の管理を、彼の解放奴隷のうち最も忠実であったムラド総督 (Murad Voyvoda) に任せ、彼の死後は将来にわたって彼の子孫が管理することを規定した。さらに、同時代の相続人のうち最もまじめな者をワクフ管財人 (mütevelli) に、その他の者から監督人 (nazir) や地代や家賃の徴収者 (cabi) を選出することを条件付けた。

ワクフ管財人には寄進者自身の子孫になるのが一般的であったので、ヒュスレヴ・ベイは何らかの理由で解放奴隷であるムラドに管財人を任せることになったと考えられる。

以上がモスクをはじめとした施設群の運営のための財源を指定している部分である。ここでオスマン帝国下の土地所有と税制のかかわりを見てみると、「農村がワクフ指定された場合、それは村の農民が支払う税 (一部または全て) が寄進されたにすぎず、土地の所有権 (ラカベ) が国庫 (ベイトゥマール) に属していることは、他の直轄地やティマール地とかわらない。国庫の所有者はスルタンであるから、どの徴税権をワクフ財に指定するかはスルタンの権限に属し、その変更や取り消しはスルタンの判断によって行いうる」と 16 世紀のシェイヒュルイスラーム・エブースード・エフェンディらによって明確に言明されている³²。つまり、上でいう村や耕作地といった不動産ワクフは、そこからの税金がワクフ財源に当てられたということである。他に店舗などは、その賃貸料と考えればよい。

³² 林佳世子、前掲論文、270 - 271 頁。

支出面

次に、これらの収益からモスクの運営のために充てられた費用についての記述を見ていく。

1.モスク

	日給
・ワクフ管財人 (müteveli)	30 デイルヘム
・監督官 (nazir)	10 デイルヘム
・書記 (katib)	7 デイルヘム
・説教師 (hatib)	8 デイルヘム
・イマーム	7 デイルヘム
・礼拝呼びかけ人 (müezzin) 2 人	一人に 4 デイルヘムずつ
・金曜礼拝を告知するもの	1 デイルヘム
・金曜礼拝の後、街区で美しい声で コーランを読む者のリーダー	4 デイルヘム
・残りの 3 人	一人に 3 デイルヘムずつ
・客人として町にいるコーラン読唱者(kurra)	2 デイルヘム
・コーラン暗唱者(hafiz)	2 デイルヘム
・礼拝呼びかけ人	2 デイルヘム
・女のコーランの先生(muarrif)	2 デイルヘム
・外壁の見張り(noktacı) ³³	1 デイルヘム
・雑役 (kayyım) 2 人	一人に 3 デイルヘムずつ
・ランプ係 (çırağı)	3 デイルヘム
・コーラン読み ³⁴ 30 人	それぞれに月 40 デイルヘムずつ

この他、臨時職への俸給として、

・イマーム、書記、礼拝呼びかけ人、その補助的役割の職 (münadi) 4 人のコーラン暗唱者、集団礼拝に参加した者のリーダー (sermafil) 先生、壁の見張りのうちの金曜礼拝の出席者、毎正午の礼拝のあと勤める、神への賛辞を行う者 (müsebbih) のそれぞれにその 1 回ごとに 1 アクチェ

³³ 壁を、書きものや傷から守るためのもの。

³⁴ 恵み深いコーランを読み通すためにそれぞれが日に 1 章ずつ読み、善行を預言者ムハンマドに、またワクフの精神に贈るようなコーラン読み。

- ・雑役、ランプ係が、ミュセッピフとともに演壇で Aşr (コーランの 10 分の 1) を読むという特別の仕事 (sermafil) としてその義務の遂行を条件に 1 日 2 デイルヘム
- ・モスク中庭の泉に仕えるためのイマーム・エフェンディに仕事の地位として 2 デイルヘム
- ・修理屋に 3 デイルヘム
- ・カンディル (kandil) 祭³⁵のランプのためのオリーブオイルのために 3 デイルヘム残しておくことが規定されている。

以上の役職のなかには、礼拝呼びかけ人やコーラン読みなど、互いに似通ったものがいくつあつたが、それぞれに細かく違った役割分担があつたと思われる。その具体的内容についてワクフ文書には記述がないのだが、ただ、多くの宗教関係者が勤め、盛んな宗教活動がおこなわれていたことは明らかである。

2. ハーンカー

ここではスーフィー教徒たちと教団長 (シェイフ) がエヴラット³⁶やズィクル³⁷、ナマーズ、そして断食などの修行を行うことが保証され、ヘルヴェティー教団のシェイフのうち最もよいシェイフになると 1 日 10 デイルヘム³⁸、一般のスーフィー達のそれぞれには月 10 デイルヘムが約束されている。

イスラーム世界にあって、内面を重視し神との合一を目指すというスーフィーは、土着の要素などイスラーム以外のものへの柔軟性、寛容性などから多分に布教を担ってきた。この例からもわかるように、ワクフ制度の中でも、スルタン、または軍人や地方統治者など有力者によって修道場が建設され、さらにワクフ収益からシェイフ、教徒たちに俸給が支給されている。スーフィーといっても世間と隔絶したものでもなければ、弾圧の対象となっていたわけでもない。そしてこのハーンカー、時にザーヴィエ、テッケなどの呼称で呼ばれる修道場は、スーフィーの修行のための施設であつたが、一般の人々もここを訪れてズィクル (称名) などをおこなつた。とくにオスマン朝下においてベクターシュ教団やメヴレヴィー教団などトルコ系の教団のテッケが

³⁵ イスラームの聖夜。モスクのミナレットがイルミネートされる。

³⁶ コーランの 1 節を唱える修行法。

³⁷ 「神は偉大なり」「神に栄光あれ！」などアッラーの名前を含んだ章句を唱える修行法。

³⁸ ただしこれらの資料は別のところでは月になっており、日給なのだから月給なのだからはっきりしない。

数多くつくられた。第1章3節で紹介したエヴリヤ・チェレビーの記述にも、サライエヴォの町には47のテッケが存在したことが述べられている。ちなみに、中東の主要都市の1つであるダマスクス、モスクの数は1000を越えたとされている16世紀はじめのテッケの数は76である。また同様のカイロ15世紀前半においてはモスクの数52に対して58のテッケがあったとされている³⁹。

3.モスク東のメクテップ

- ・教師 日に5ディルヘム
- ・アシスタント 日に2ディルヘム

この他

- ・みな先の頭に立って祈りをする2人の敬虔な者、5回の定刻の礼拝の後礼拝を必要以上にやって善行をワクフ精神に贈る、それぞれ全員に日に5ディルヘム
- ・孤児と貧者の衣服（施し物として与える）のために日に3ディルヘム
- ・イスラーム暦3番目の月（Rebiulevvel）のムハンマド誕生の夜（mevlid levazımı）の必需品のために300アクチェが充てられていた。

4.モスク西側のザーヴィエとイマーレット

ここでは、分配された食事の量が明記されている。

- ザーヴィエに来ては去っていくウレマー、シェイフ、スレハー（ウラマー職の一種）、サダット（ムハンマドの子孫と共同者）そして貧者、病人、奇人のために
- ・朝と正午……1キーレ（約35リットル）のきれいにされた米のスープと肉
 - ・正午の礼拝のあと……1/2キーレの小麦スープ
 - ・金曜の晩……えり分けられた3キーレ9オッカのダーネ・ピリンチ（米をバターで調理したもの）、1キーレの米、3オッカのオイル、12オッカの蜂蜜でできたゼルデ（甘いゼラチン状のデザート）
- また、ラマザンとカンディルには金曜の夜の準備がなされていた。

個人に対しては、

³⁹ 三浦徹『世界史リブレット16 イスラームの都市世界』山川出版社、1997年、28頁。

日に 50 ディルヘム (160g) の肉 96 オッカのパンに使う小麦 1,000 ディルヘムの施しのパン (fodla) 玉ねぎ、塩	}	のために毎日 15 ディルヘム
---	---	-----------------

この他、客人のもてなしのために日に 30 ディルヘム。うち冬の時期には日に 4 ディルヘム分の薪の割り当てに、モスクやイマーレットなどから日に 20 ディルヘム割り当てることを条件としていた。

さらに、ワクフ管財人を除いたモスクやイマーレットで働く者達のそれぞれに、朝夕 1 人分ずつの食事と、1 と 1/4 のパン (fodla) が分配されることが規定されている。

次に、このイマーレットの雇われ人の俸給についての言及がある。

	日給
1 シェイフ	8 ディルヘム
2 ナキーブ達 ⁴⁰	それぞれに 2 ディルヘム
3 清掃人 (ferraş) ⁴¹	4 ディルヘム
4 執事 (velilharca)	4 ディルヘム
5 食料品室人 (kilarcı)	4 ディルヘム
6 倉庫番 (anbarcı)	3 ディルヘム
7 小麦	1 ディルヘム
8 小麦粉	2 ディルヘム
9 厩番 ⁴²	2 ディルヘム
10 料理人	2 ディルヘム
11 料理人の見習い	1 ディルヘム
13 清掃人 (temizlik yapan)	1 ディルヘム
14 門番 ⁴³	2 ディルヘム

⁴⁰ 朝と夕方 2 回、(メドレセの) 学生や貧民、客人に対し定められた方法にしたがってパンを分け、食事を配る。客人がイマーレットに到着した日から 3 日目の食事の終わりまで、割り当てられている食事を彼らの前に運ぶ。

⁴¹ 決まった時間にイマーレットの清掃を行い、また敷物を広げ、たたむという仕事にあたる。

⁴² イマーレットの厩の管理とそこでの動物の世話、および、夜半の礼拝の後で厩の門を閉め、夜明けの礼拝の前にそれを開ける。

⁴³ 食事が出され、それが配られている間、門のところに立ち、食事の支給にあずかるために来ている者のなかで礼儀作法違反するものがあれば、そこから連れ出してとが

15	皿洗い	2 デイルヘム
16	肉の運搬人	1 デイルヘム
17	サライボスナの土地と Tursun Çeribaşı, Botle, Çernerika の地代徴収者	5 デイルヘム
18	Çetine 地区の徴収者	5 デイルヘム
19	Prozor 地区の Kromiş の徴収者	4 デイルヘム
20	書記官	1 デイルヘム
21	Siroz の馬の番人	3 デイルヘム
22	種馬の世話係	2 デイルヘム

そして全員にシロズ地方のキーレで 2 キーレの小麦が与えられていた。

さらに、シロズのクロミシにおけるメスジドとメクテップにも収益が割り当てられていた。ワクフ制度を通して近隣の農村にもメスジドやメクテップが建てられることがあったが、これもひとつの例だろう。

メスジドのイマームと、メクテップの教師に日に 5 デイルヘムずつ、
ミュエZZインに 2 デイルヘム、
敷物とカンディル祭のオリーブオイルに 0,5 デイルヘム
の割り当てである。

(3) イスタンブル、ファーティフ施設群との比較

ここで、オスマン朝下のサライエヴォ都市建設の規模・質を、その一端を例にとってではあるが、相対的に明らかにしたいと思う。そこで、首都イスタンブルのファーティフ施設群 サライエヴォにおけるヒュスレヴ・ベイ施設群と同じく、征服後のイスタンブルにおいて再建の中核を担ったといわれている のイマーレットとの比較を行ってみよう⁴⁴。

財源の比較

1482 年、ファーティフ施設群が完成すると、そこに含まれるモスク・メドレセ・病院・イマーレットなどの運営のため、イスタンブル市内の 12 のハマームの賃貸料とジズ

め、必要とあらばそのものを打つ。

⁴⁴ 林佳世子「イスラム都市の慈善施設「イマーレット」の生活」『東洋文化』第 96 号、1989、124 - 126 頁。

ヤ(人頭税)収入、さらにトラキア地方の45の農村からの収入が、ワクフ財源として与えられた。

これに対しヒュスレヴ・ベイ施設群は、先に見たように、ボスナ地方の44の農村からの収入、サライエヴォ市内のいくつかの店舗の賃貸料がワクフ財源に指定された。また、建物の説明のメドレセの項で書いているように、ヒュスレヴ・ベイはメドレセのために個別に寄進状を整えさせている。これによると、サライエヴォ市内の住宅や店舗がさらに財源に充てられている。

このように、財源としては似通ったものが指定されているが、ファーティフの方は市内からの収益を主に公共施設ハマームによっており、ヒュスレヴ・ベイは店舗、つまり商業施設によっている。

職員の比較

つぎに、2つの施設群での生活の内容を比較するためにイスタンブルのファーティフ施設群のイマーレットで働く職員についてのワクフ文書の記述を見てみよう。

ファーティフ施設群のイマーレット職員とその俸給⁴⁵

	日給
1 シェイフ	20 デイルヘム
2 書記	6 デイルヘム
3 購入責任者	5 デイルヘム
4 倉庫番	5 デイルヘム
5 清掃人 2 人	一人 3 デイルヘム
6 雑役 2 人	一人 3 デイルヘム
7 ランプ係 2 人	一人 8 デイルヘム
8 ナキーブ 4 人	一人 3 デイルヘム
9 門番 2 人	一人 3 デイルヘム
10 料理人 6 人	一人 4 デイルヘム
11 パン焼き職人 6 人	一人 4 デイルヘム
12 厨房に肉を運ぶもの	3 デイルヘム
13 小麦をより分けるもの 2 人	一人 3 デイルヘム
14 皿洗い 2 人	一人 2 デイルヘム
15 厩番 2 人	一人 2 デイルヘム

⁴⁵ 林佳世子、前掲論文、129 頁。

16 飼葉倉番 ⁴⁶	2 デイルヘム
17 薪の運搬人	2 デイルヘム
18 外壁の番人	2 デイルヘム

ヒュスレヴ・ベイのワクフ文書の中では食事を分配される学生や職員、客人の人数にふれられていないため、イマーレットの規模についてここで資料を並べて比較することができないが、働く職員の種類はほとんど同じである。ヒュスレヴ・ベイのイマーレットに地代徴収者がふくまれているのは、これらの地代が直接イマーレットの運営費にあてられていたからであろう。ヒュスレヴ・ベイのイマーレットの執事とは、ファーティフの購入責任者と同義、また雑役、ランプ係、外壁の見張りはヒュスレヴ・ベイ施設群においてはモスクの方に記述があるので、そちらと兼ねていたものと推測できる。個々の俸給については全体的にややファーティフの方が高い感がある。これは首都イスタンブルとサライエヴォとの物価差を示しているのではないか。

このように、首都イスタンブルと山間の中継都市サライエヴォは、1つの施設群というごく限られた例からではあるが、少なくともその質はほとんど変わらないと言えるだろう。ここではイマーレットの職員について具体的に2つを比較したが、この他イマーレットで分配される食事の内容についてもほとんど変わらないことがわかった。食事の内容は年間を通して基本的には変わらず、若干の季節的な変化があるだけであった。第1章第2節で見た地方統治者の館の例でも示されたが、このイマーレットの運営方法を見ても、オスマン帝国内の都市の建設・統治に関して広くひとつのシステムが存在していたことがわかる。これはアナトリアからバルカンまでが1つの文化圏に内包されていたことを示すものであるが、オスマン朝支配の中央集権制のひとつの現れであるともいえるかもしれない。

このファーティフ施設群は、例えば同じイスタンブルのスレイマニエ施設群同様、スルタンのワクフである。一方サライエヴォにおけるヒュスレヴ・ベイ施設群はサンジャク・ベイによってつくられたものである。ただし、すでに述べたように国庫はすべてスルタンに属するものであるから、このように有力な軍人、官僚、ウラマーらが施設をつくる場合、スルタンからワクフ寄進を条件に国有地である農地の下賜を受け、それをワクフ指定したものである。その証拠にこのガーズィー・ヒュスレヴ・ベイのワクフ文書も、上述のように譲渡書とともにスルタンによって承認されている。

オスマン朝下の都市建設は政治、経済と密接に関連したこのワクフ制度を通してお

⁴⁶ 客人の動物のための大麦の倉庫の番人。客人に対しては彼らの動物のための飼葉を必要なだけ与える。

こなわれ、その運営もワクフ寄進によって成り立っていたことがわかった。つまり、現代において政府や地方自治体がおこなう都市整備、教育、福祉などといった行政活動が、すべて宗教的寄進制度を通しておこなわれていたということになる。(警備はスルタンの親衛隊であるイエニチェリ兵がおこなっていた。)ここに、イスラーム世界の都市の独自性が見られ、さらにイスラームが単なる宗教にとどまらずに人々の生活規範として成り立っていたことが改めて実証される。また、サライエヴォという都市が単独に存在したのではなく、周りの都市や農村と密接な関係を持っていたことが分かった。さらに、商人をはじめとした客人も多く滞在していたことがワクフ文書の俸給などに関する個々の記述から分かる。これはまさにイスラーム都市としての性格を表しており、サライエヴォがイスタンブルやサロニカから西へ向かうキャラバンルート上に位置し、イスラームネットワークのなかで宗教上、商業上重要な位置を占めていたことを表している。

第3節 施設群内の建築物

つぎに、施設群を構成していたこれらモニュメンタルな建造物にはどのような特徴があり、サライエヴォの歴史のなかでどのような運命をたどったのか個々に見ていくことにしよう。以下は Ayverdi, *op.cit.* pp.346-354 を参考にまとめたものである。

(1) 寄進時に建設された施設

A. モスク

このモスクは、逆 T 字型の初期モスクと 16 世紀以降の古典型の両方の特徴を持つ過渡期型のモスクである。イスタンブルのアティキ・アリ・パシャ・モスク(図 8)や、バニャルカのフェルハド・パシャ・モスク(図 9)⁴⁷が同じ形式である。これらは 1 つの中心ドームと、前の半ドーム部分のミフラーブ室、そして両側のそでという構造になっており、内部空間の広さやドームの大きさもほとんど変わらない。アティキ・アリ・パシャ・モスクは 1496 年、フェルハド・パシャ・モスクは 1587 年の建設である。このモスクについて建築家 Ayverdi は、「オスマンのボスナ - ヘルセツキ県最大のモスクであるが、社会的な価値は大きいものの、建築価値の観点からはそれほどでもない」としている⁴⁸。

⁴⁷ 16 世紀、フェルハド・ベイがボスナ・サンジャク・ベイ位にあった時に建設。先の紛争時、ボスニア人の駆逐とともにバニャルカでは町のモスクはすべて破壊され、このモスクも今は土台だけになっている。

⁴⁸ Ayverdi, *op.cit.* p.346

また、モスク入り口の前にある水場からは、冬季にはお湯が出るよう準備されていた。これについて、エヴリヤ・チェレビーの記述を追ってみよう。

— このモスクは、昼も夜もくつろいだ信徒達でいっぱいである。なぜなら町のにぎやかな場所にあるからである。ミナレットつきで全ドーム型の、鉛造りの古いモスクである。スレイマン・ハーンの時代に、ベイレルベイのひとりが戦利品によって作らせた精神的なモスクである。ワクフ財産は大変豊かであるため、管財人はその財源から人々のために、ボスナ地方の厳しい冬の時期に、イマーレットの大鍋ほどの大きな鍋でお湯を沸かして全ての蛇口からお湯が出るようにさせている。全ての礼拝を行う者たちはこのお湯で身を清め、礼拝をする際にはヒュスレヴ・パシャに感謝の祈りをささげている。多くのモスクでこのようなお湯の出る蛇口が存在する⁴⁹。

エヴリヤ・チェレビーがあえてこのように水場のお湯について言及しているということは、こうしたサービスが他ではあまり見られなかったからでということでははないだろうか。やはりこの地方の冬は昔から厳しかったのだろう。

19世紀、オーストリア ハンガリーの支配下に入ると、オスマン朝時代に建てられた建築もその影響を受けるようになる。このモスクも回廊の柱やミンバル（説教壇）入り口の右側にある2階部分のマフフィル⁵⁰、マスケーレ⁵¹などにロココ ルネサンス風の装飾が施され（図 10）、またミフラブや窓枠には色が塗られたり模様が描かれたりした。さらに中庭の噴水の池にも装飾がなされ（図 11）、周りの手すりや欄干はルネサンスやバロック様式で飾られた。Ayverdi はこれらを「元の建築と全く調和しない、派手で醜い仕打ちである。」と非常に嘆いているが⁵²、18世紀イスタンブルのヌル・オスマニエなどオスマン人が自ら進んでバロック様式を取り入れた例もあり、必ずしもオスマン建築を台無しにしたということとはできないと思う。確かにモスクの中にヨーロッパ風のシャンデリアがあるのには違和感を拭うことはできないが、それもオーストリア人のオスマン建築への敬意の表れの1つとは受け取れないだろうか。もし敵意からであれば、とっくに破壊されているはずだからである。地味に映るオスマン建築に、自らのセンスで華やかさを添えようとしたのかもしれない。イスラームのモスク建築は、ヨーロッパの教会建築とは違い、細かな装飾などがなされていないのが

⁴⁹ Evliya Çelebi, *Seyahatnamesi* 5.C., p.297

⁵⁰ モスク内の柵で囲まれた壇。ここで集団礼拝の長（sermafil）がイマームの動きを反復し、信者達に見せる。

⁵¹ スルタンなど貴人のために設けられた、柵で囲まれた壇。

⁵² Ayverdi, *op.cit.*, p347

特徴だ。イスタンブルのスレイマニエやスルタン・アフメトなどの有名なモスクでも外観は鉛の打ちっぱなしで、細かい装飾で覆われたヨーロッパの宗教建築に比べて地味に映ることは確かだ。これは美的センスがヨーロッパとは全く違ったところにあったためであろう。モスク建築といっても、ペルシャ、シリア、トルコ、中央アジアなど地方によって形式はだいぶ異なっているが、例えば、オスマン建築に特徴の尖った鉛筆型のミナレットなしには、旧オスマン帝国領下の各地に見られるモスクのあの美しいシルエットはありえない。イスラーム世界にないものをヨーロッパ世界は持ち、ヨーロッパ世界にないものをイスラーム世界は持っていた。

B.メドレセ

モスクの門の向かいは、美しい、洗練された屋根付き中庭構造のメドレセである。(図 12、13) イスラーム暦 943 年 (1537 年) モスク建設の 6 年後の建設である。ガーズィー・ヒュスレヴ・ベイはこのメドレセのためにある別の寄進状を整えさせた。

これによると、

- a) チュクルクチュ街区の 2 つの家、セルダブ = 夏の別荘、家畜小屋、地下倉庫、果物の木々を含む庭、1 つの店舗、その他に肉屋の店舗を含むトゥルナデベ不動産
- b) イサ・ベイ・ワクフなどに囲まれたセルダブ、家、庭、そして 9 つの店舗を含んだ Mahmud ibni Çavuş Hoca 所有地、フィレンキ・スークと呼ばれた不動産
- c) ワクフの自身の建物である 2 つの家
- d) これらに一列に並んだ から買われた一軒の家、1 つのセルダブ
- e) 資産から分けられた、700,000 銀ディルヘム。この金額からの 400,000 アクチェによって、モスクの門の向かいに 12 の小部屋を含み、中に学生が住むメドレセを建設し、その残りで信頼のできる本を買い、その残りは職員の俸給に充てるように。

と規定されている。この命令により、テフシル(コーランの解釈書)、ハディース(ムハンマドの言行録)、ウルール(法源)、フルー(分派)、メアーニーのような知性と伝達の学問を教育する教授に毎日 50 ディルヘム、ムイードに 4 ディルヘム、学生のそれぞれに 3 ディルヘム、門番(用務員)に 2 ディルヘム与えられることになり、この残りが管財人の手に保持されることになっていた。イマーレットで調理された料理のうち教師の助手や学生に朝と夕、肉とスープと 4 つのフォドラが、金曜と祭りの日には普通の私的な料理が与えられることになっていた。管財人はここでもムラド総督である。彼の死後は子孫が相続し、この任務を行うことになっている。寄進状の日付は

943年7月26日(1537年1月8日)である⁵³。

このメドレセでは最近まで教育が続けられてきたが、1960年以降、もはや高水準のイスラーム神学校ではなくなり、高校のレベルに落とされた。中学校卒業後、5年間の教育を受けて卒業した者は、イマーム、ハティーブ、説教師(vajzlik)の仕事のみ就くことができる。学生の人数は1963-64年でたった152人であった。さらに後、メドレセは土地と賃貸不動産とともにユーゴスラビア政府によって没収され、学生はぼろぼろの旧オーストリア軍学校の校舎に追われてしまった。

ここでオスマン朝支配後の教育制度に言及すると、まずオーストリア=ハンガリー占領下において公共機関の大幅な改革がおこなわれ、ウラマー層の権威は落とされた。そして、1887年にはムスリム法廷とこれまでの聖職者のための特別の訓練施設が設立された。これは1887年から第2次世界大戦までの間ボスニア=ヘルツェゴビナのイスラーム知識階層育成の場として非常に有名な *Šeriatska Sudačka Škola u Sarajevu* である。この機関はその後何度かの改組をへる。また1892年には教員養成のための3カ年課程の学校も設立された。しかし、世論の変化からムスリムの子供達は世俗的な初等教育機関や専門学校に通い始めるようになり、なかには、医者やエンジニアの資格をとるためウィーンやブダペストに留学するものも出てきた。こうした社会情勢の変化にもかかわらず、ヒュスレヴ・ベイのメドレセで長い間高水準の中等教育が行われてきたことは特筆に価するが、共産主義政権下においては、ムスリム法廷の閉鎖と同時に1946年4月、すべてのイスラーム宗教学校が閉鎖された。しかしその後、さらなる情勢の変化により主な宗教教育施設、とくにヒュスレヴ・ベイのメドレセが再開され、1977年にはイスラーム技術学部が設立され、これは今日まで続いている⁵⁴。

C.メクテップ

ガーズィー・ヒュスレヴ・ベイのはじめの寄進状でハーレムの東にあったとされるメクテップの建物は、今日は存在しない。まずオーストリアの指揮でサヴォア公オイゲンの攻撃で1697年に焼かれ⁵⁵、再建されたが1766年に再び燃え、1766年に蘇り、

⁵³ Ayverdi, *op.cit.* p.348

⁵⁴ Popovic, *op.cit.* pp.32-33

⁵⁵ 17世紀以降、オスマン帝国とオーストリアとの間ではしばしばおこなわれた戦争は、サライエヴォにも爪痕を残している。とりわけ、17世紀末の神聖同盟との戦いでは、オーストリア軍はサヴァ川を越えて侵攻している。このメクテップが焼かれた1697年には、ゼンタの戦いに大勝したサヴォア公オイゲンの軍隊によってサライエヴォは一時占領され、荒廃した。

1788年と1831年、1842年に再び火事に見舞われ、最後に1843年に修復がなされたのではあるが、もはやそこで教育は行われなくなり、神学アカデミーの向かいの新しい建物に移され、1952年にイスラーム教育が禁止されたことによって、教育はもはや行われなくなった。

D. ガーズィー・ヒュスレヴ・ベイ・ハーンカー

はじめの寄進状でヒュスレヴ・ベイが示したように、まずヘルヴェティー教団が宗教儀式を行ったこのハーンカーは、後にナクシベティー教団のシェイフが管理するようになった。細長い建物であるこのハーンカーは、15の小部屋からなっている(図15)。この建物も何度となく燃えている。まず1697年のオーストリアの占領で焼かれ、1755年にまたはじめから再建され、1831年、1852年にまた燃え、再び修理がなされた(図16)。しかし、メドレセへの追加として新しいものが建設されている間に、破壊された。

E. ザーヴィエ付属のミサーフィルハーネとイマーレット

最初の寄進状でモスクの西側に一直線になっていると示されているザーヴィエは今日何も残っていない。このザービエとイマーレットはまず1697年の前述のオーストリアの侵略で焼け、1740年に再び建設されたが1831年、1842年、1852年、最後に1897年の火事でも被害をこうむった。すぐに修復された。しかし1878年オーストリアの占領でザービエは閉鎖され、ただ修道僧にイマーレットから食事が与えられることだけが続けられた。

F. ガーズィー・ヒュスレヴ・ベイ図書館

ヒュスレヴ・ベイが作ったはじめの図書館の痕跡は残されていない。ただ、現在図書館はヒュンキヤル・モスクの前の追加の建物に移されており、ガーズィー図書館の名前で知られている。図書館には6,456の写本、9,000の刊本、84冊のカーディー帳簿や台帳、400のワクフ文書、3,500のばらばらの古文書がある。しかしこれらの書物も先の内戦で焼失した恐れがある。

G. ガーズィー・ヒュスレヴ・ベイのタシュハーン アティキハーンと常設市場

町の大市場を形成している、モスク近くのこのハーンとチャルシュの建設年は明らかではない。ハーンとチャルシュが隣接して建てられるのは一般的なことであるが、ここでも1つのワクフの管理の下、まとまって建設されている。はじめの寄進状でイサ・ベイ・ワクフの近くに、1つの屋根の下に60の店舗と屠殺場などが寄進されている。これらはチュクルクチュ街区にある。この一群の建物はベデスタンと呼ばれることが

あるが、ベデスタンとは全面が壁で囲われ、店舗の下に地下倉庫を含んだ、四方が店舗で取り囲まれた建物である。これは細長い形で上部に屋根のある店舗の並びからなる建物で、チャルシュあるいはアラスタである。

タシュハーンは 1879 年の火事で焼失し、修復がされたが 1912 年のオーストリア占領時に完全に破壊された。ブルサに同じようなハーンが多く見られるが、このプランには地上階しか示されておらず、またほかのハーンで部屋の前に普通とられている回廊も示されていない。しかし、チャルシュで同じような一対の階段があることなどから、回廊と上階は必ず存在したと Ayverdi は言っている。寸法は通りに面した正面 50.0 メートル、奥行き 68.0 メートルである。地上階の 29 の小部屋は 5.0 メートル×4.0 メートルの寸法で、12 の店舗、家畜小屋、トイレから成っていたことがわかっている（図 17）。このハーンは、ブルサやあるいはルメリ州に多く存在したハーンのうち、並外れて大きなものである。ハーンの跡に、現在は Evropa Oteli が建てられている。

チャルシュは、長さ 107.0 メートル、幅 33.0 メートルの寸法である。通路を挟んで 6 メートルの奥行きがあり、平均 3.0 メートルの、奥内 49、屋外 30 の商店からなっている（図 18）。1981 年現在、本当に多くが荒れ果て、通路のアーチ型屋根も壊れてしまっている。2002 年現在、内戦後の町の復興とともに修復がなされている可能性もあるが、定かではない。

H. ヒュスレヴ・ベイ・チフテ（男女別の）ハマーム

チフテハマームについての言及はワクフ文書には見当たらないが、Truhelka は 17 世紀には実在したと述べている⁵⁶。このハマームは対になっており、それぞれ等しい 2 つの大きなドーム型の浴場と涼み場、その側面にトイレとかみそり場（usturalık）それに 2 つずつの個室（halveti）がある（図 19）。

このハマームは 1914 年まで機能しており、現在はナイトクラブとして使われている（1981 年現在）ということだが（図 20）先の内戦を経た 2002 年現在このナイトクラブが運営されているかどうかは定かではない。

I - J. ガーズィー・ヒュスレヴ・ベイとムラド・ベイの墓

モスクの東に一緒に並んで墓がある。どちらも六角であり、寄進者ヒュスレヴ・ベイの墓は半径 4.40 メートル、管財人ムラド・ベイの墓は半径 2.75 メートルの円上にある（図 21）。やはりオーストリア占領下に墓の内部はモスクになされたのと同じように

⁵⁶ *Ciro Truhelka, Tursko-slovenski Spomenici Dubrovačka Arhive, Sarajevo, 1911, p. 176 (Ayverdi より)*

装飾が施された。Ayverdi はここでも、「全く美しくない装飾によって、建物の建築様式と全く合わない醜い姿にされてしまった。それが主人ガーズィーの魂を苦しめている。」⁵⁷といている。

このように施設群内には多くの場合、寄進者の墓と並んでその妻や管財人に選ばれた者などの墓がつくられた。例えば、この章のモスクの説明で比較したバニャルカのフェルハド・パシャモスクには、フェルハド・パシャの墓の他に礼拝の主唱者(Bayrak) 妻 (Safi Kadın) の墓もつくられている。

「ヒュスレヴベイワクフの管財人となった誠実なムラドベイの子孫から成る後継者達は忠実さと誠実さで任務を続け、全く弱さも見せずにキリスト教国家支配にも屈服せず格闘を続け、ワクフ収益の余りから多くの新たな賃貸不動産をつくった。」とは Ayverdi の言だが、ワクフ財産を上手に管理しその収益から新たに賃貸不動産をつくり、さらなる収益を生み出していくことは、イスラーム世界一般に見られたワクフ管理の方法である。新たにつくられた賃貸不動産の大体はみなハーンである。ヒュスレヴ・ベイ施設群においては次の 4 つのハーンが新たにつくられた。

(2) 後に管財人の手によって建設された賃貸不動産

K.イマーレットハーン

古いミュサーフィルハーンとイマーレットの場所に、ムフティーのフェトワとベイレルベイの許可によって、賃貸する目的で当時の管財人達によってつくられた。費用負債の償却後、ワクフ所有に返還された。

L.イエニハーン

ハーンカーに隣接したワクフの敷地内に、タシュハーン内の馬具職人、ムスタファ・ギュル・アー (Mustafa Gül Ağa) という名の人物によってつくられた。92 の部屋と多くの店舗を含んでいた。以上は Evkaf 帳簿の 1174-1179 年に記述がある。ハーンは 1766 年に燃え、1768 年に再建され、1831 年に再び燃え、1833 年にはじめからつくり直された。1879 年に再び焼失すると、1897-1924 年の間にそこに 4 つの新しい様式の建物がつくられた。

⁵⁷ Ayverdi, *op. cit.*, p353

M.MORİÇA 2番目のハーン

Moriç 家によって建てられ、18世紀はじめにヒュスレヴ・ベイ・ワクフの所有となった。オスマン型のハーンのうち、唯一残っている建物はこれだけである。これも賃貸物件であり、何度か火災の被害を受けている。地上階の36の小部屋は、11の小部屋、トイレと家畜小屋から成っていた(図22、23)。現在は修復がなされ、内部はコーヒーハウス レストランが設けられている(図24)。

N.コルックハーン

ヒュスレヴ・ベイ・ハーンの管財人代行ハーフィズ・ハリル・エフェンディ(Hafız Halil Efendi)が、シェイフ・ハジユ・イドリス(Şeyh Hacı İdris)に売り、ワクフ所有から手放したこのハーンは、ガーズイー・ホテル(Gazi Oteli)の敷地にある。Han Hacı Bali Kulin ワクフに属した用地に建てられたために、毎年そのワクフに賃貸料を支払っていた。

O.時計塔

ガーズイー・ヒュスレヴ・ベイワクフの中央に、イマーレットとつながった四角形の高い建物である(図25)。

以上のように、ワクフというひとつの基金からなる施設群内にはさまざまな建物が相互に関連しあいながら存在していた。ここでは、サライエヴォ、そしてボスニア最大といわれるヒュスレヴ・ベイのワクフを例にとって見てきたが、施設群の成り立ちはオスマン朝下を通して、規模の差こそあれほとんど似ていることがよくわかった。第1章3節で紹介したサライエヴォにおけるほかの施設群の構成や、第2章4節のイスタンブルとの比較からも明らかになった通りである。ここでは具体的に示すことはできないが、オスマン朝以外のイスラーム世界全域においてもほぼ共通した成り立ちとなっている。そしてこれらは、盛んな宗教活動を行うためのモスク、メドレセ、メクテップ、イマーレット、ハーンカーといった宗教施設、それらの管理・運営費を賄うためのハーンや市場、ハマームといった商業施設、というように役割分担が分かれていた。こうした、計画的で合理的な都市計画に基づいて、宗教・経済がうまく融合し、また網の目のような商業ネットワークに支えられたイスラーム都市が成り立っていた。

そして時代の移り変わった今、跡形もなく破壊されてしまったものもあるが、あるものはその役割や形を変えながら、そしてあるものはかつてと変わらない機能を果たし続け、オスマン建築は生き続けている。

おわりにかえて

サライエヴォは、途中、共産主義政権下においてイスラームの宗教学校がすべて閉鎖されたりしたこともあったが、オスマン朝による直接のイスラーム支配が終わって1世紀以上たった現在でもやはり、バルカンにおけるイスラーム文化の中心地であることには変わらない。モスクのミナレットからは朝に夕に礼拝を呼びかけるエザーンが流れ、泉では礼拝前に身を清める人の姿がみられる。またバシュチェルシーヤではトルコと同じ銅細工などの手工芸品店が軒を連ね、通りのコーヒーハウスではトルココーヒーが飲まれている。



モスクの泉で身を清める

1 - 2 章を通して、オスマン朝時代のサライエヴォの、イスラーム都市、オスマン都市としての性格はずいぶんと明らかになった。都市建設の中核を担ったものはワクフ制度であり、この制度によって都市の生活、経済が成り立ち、財源となる農地を寄進することで周辺の農村とも緊密な関係を保っていた。またキャラバンルートでつながれた各都市間の行き来も盛んで、町には常に商人をはじめとした多くの人々が訪れていた。そして客のもてなしは、やはりワクフ制度を通じて宿、食事、客の動物のための厩と飼葉までがまかなわれた。ここでは、もちろんムスリムであることの利便性は大きかったものの、民族・宗教をこえて人々は交流し、共存していた。

また、第2章4節の個々の建築体の検証からは、サライエヴォがたびたび火事に見舞われていたという事実や、この地の支配権の移り変わりにともなって建築自体やその役割もまた変化してきたという事実が明らかになった。オスマン都市として建設されたサライエヴォは、その統治を離れた後独自の歴史のなかで独自の発展を遂げたといえるだろう。しかしその中でもこれだけ当時の景観をよく残し、イスラーム文化も衰えてないということは、この地の人々に今でも脈々とオスマン人の血が受け継がれていることの証拠ではないだろうか。ただ、建築体の紛争後の現在の状況についての調査が資料の乏しさから十分にできたとはいえない。本稿で現存すると述べたもののなかにも実際にはすでに破壊されてしまったものもあると思われる。しかし、紛争も

一応は終結した現在、町の中心部においては復興もかなり進み、町は再び落ち着きを取り戻しつつあるということである。この点に関しては一度自分の足で実地調査に赴く必要性を感じており、それを今後の課題としたい。



紛争時に一旦は破壊された橋も 2000 年には修復が完了した。

本稿の目的は、サラエヴォという都市を、建築を通してその歴史や文化を明らかにすることであったが、その動機は世界の注目を集めたユーゴスラビア内戦の舞台となった一都市を、それとは違った角度からも眺める必要性を感じたところにある。オスマン朝時代、確かにサラエヴォはイスラーム世界の一都市であった。そしてムスリムにとっての宗教的義務の 1 つであるメッカ巡礼もさかんであり、これには大商人や有力な名士はもとより、中流の都市民や富農までもが出かけた。永田雄三氏によれば、遺産目録文書を残したムスリム男性 3492 人のうち約 10%にあたる 364 人が、巡礼をすませたことを示す「ハッジ」の尊称をもっていたということである⁵⁸。しかしそこではダイナミックな交易路を通じてヨーロッパ世界との交流も盛んであった。エヴリヤ・チェレビーの記述にも、「来ては去っていき長くはとどまらないために街区は持たない」ギリシア人、アルメニア人、そしてヨーロッパ人たち (Frenkler) が登場し⁵⁹、つねに異教徒も多く滞在していたことがうかがい知れる。そこにはもはや現代のヨーロッパか、アジアか、アラブかといった区分ではなく、いわば 1 つの地中海世界というものが存在していた。そして生き生きとした人や物の交流があり、人々は宗

⁵⁸ 永田雄三、前掲論文、186 頁。

⁵⁹ Evliya Çelebi, *op.cit.* p.296

教や民族を超えて共存していた。これはバルカンのオスマン支配が暗黒であったとする歴史観や、今日の民族紛争の淵源がオスマンの支配そのものにあるとする見方へのアンチテーゼである。これまで以上に柔軟でさまざまな角度からの地域・歴史研究が必要とされている今、本稿がそのほんの一端の参考にでもなれば幸いである。



現在のサラエヴォの町並み

参考文献

- 柴宣弘編『新版世界各国史 18 バルカン史』山川出版社 1998
- 永田雄三「18,19 世紀サライエヴォのムスリム名士と農民」歴史学研究会編『地中海世界史 3 ネットワークの中の地中海』青木書店 1999
- 永田雄三・永田真知子「18,19 世紀ボスニア地方の人びと」『アジア・アフリカ言語文化研究所』46,47 合併号 1994
- 羽田正・三浦徹編『イスラム都市研究[歴史と展望]』東京大学出版会 1991
- 堀川徹編『講座イスラーム世界 3 世界に広がるイスラーム』悠思社 1995
- 林佳世子「都市を支えたワクフ制度」歴史学研究会編『地中海世界史 3 ネットワークの中の地中海』青木書店 1999
- 三浦徹『イスラームの都市世界』山川出版社 1997
- 山本達也『建築探訪 8 トルコの民家 連結する空間』丸善株式会社 1991

- Ayverdi, Dr. Ekrem Hakkı., *Avrupa'da Osmanlı mimar eserler: Yugoslavya 2, cild 3 kitabı.*, İstanbul, 1981
- B. Djuredjev and J.-L. Bscque-Grammont, "Khosrew Beg" in *The Encyclopedia of Islam* vol.9, Leiden, 1993
- Evliya Çelebi, *Seyahatnamesi* 5.C., İstanbul, 1984
- İsmail Hakkı Uzunçarşılı, *Osmanlı Tarihi* 2.C., Ankara, 1988
- Edited by Mark Pinson, "The Muslims of Bosnia-Herzegovina", Massachusetts, 1993
- Popvic, "Sarajevo" in *The Encyclopedia of Islam* vol.9, Leiden, 1993

図版出典

- 永田雄三「18,19 世紀サライエヴォのムスリム名士と農民」歴史学研究会編『地中海世界史 3 ネットワークの中の地中海』青木書店 1999
- 永田雄三・永田真知子「18,19 世紀ボスニア地方の人びと」『アジア・アフリカ言語文化研究所』46,47 合併号 1994
- Ayverdi, Dr. Ekrem Hakkı., *Avrupa'da Osmanlı mimar eserler: Yugoslavya 2, cild 3 kitabı.*, İstanbul, 1981
- 地球の歩き方編集室『地球の歩き方 中欧 2000-2001 版』ダイヤモンド社 2000
- <http://www.ed.kagu.sut.ac.jp/%7Ej4300627/index.htm>